

追手門学院大学
心理学部紀要第12巻抜刷
2018年3月1日発行

資 料

スーザン・ローランド著
ユング：フェミニスト改訂版(4)

第4章、4章注、訳注

翻訳 中村このゆ

Chapter Four, Its notes and Translator's notes
of *Jung A Feminist Revision* (4)
by Susan Rowland

Translation by Konoyu NAKAMURA

資 料

スーザン・ローランド著
ユング：フェミニスト改訂版(4)

第4章、4章注、訳注^{訳注1)}

翻訳 中村このゆ*

Chapter Four, Its notes and Translator's notes
of *Jung A Feminist Revision* (4)
by Susan Rowland

Translation by Konoyu NAKAMURA

第4章 ユンギアンフェミニズムとは？

そこで、筆者が今企てたのは、筆者個人の神話を物語ることである。とはいえ、筆者にできるのは、つまりただ「物語る」だけである。物語が本当かどうかは問題ではない。筆者の話しているのが筆者の神話、筆者の真実であるかどうかだけが問題である。

(Jung, ユング自伝－思い出・夢・思想, 1963^{訳注2)})

ユングはアニマにとり憑かれていた。そして、これがユングに続いてその仕事の前進を夢見る信奉者を奮い立たせるのにどうしても必要であった。しかし、このアニマにとり憑りつかれた信奉者の改訂を受け入れるかどうかは別問題である。

(David Tacey, *Remaking Men*, 1997)

4章では、グランドセオリーの伝統的「ユンギアンフェミニズム」に拘らないジェンダーに関するポスト・ユンギアンの業績をみてゆく。それによって、「ユンギアンフェミニズム」の発展につながるジェンダーに関するより複合的で多様な考えを提起する。

「ユンギアンフェミニズム」の業績は、ユングの著作（2章で概観した）の「個人的神話」の側面とつながる3章の「ユンギアンフェミニズム」とは一線を画す。そこには、ジェンダー、理論、社会に関してもっぱらユング心理学の中に基礎を置くユンギアンフェミニズムを根底から打

*追手門学院大学心理学部

ち壊す再考が含まれる。ジェームズ・ヒルマンと彼が推し進めた元型的心理学にこのようなユングアンフェミニズムの源泉がある。

また、ロバート・ブライの詩によって刺激を受けた神話詩を作る男性運動にも注目する必要があるだろう。それはジェンダーに関して「ユングアン」であることに異議を唱えるものである。筆者の目的はこのような異議が実証不能という事を示すことではない。加えて、ユングアンフェミニズムは、他の学問分野を視野に入れて用いる研究者から多くのものを得てきた。この中にはディビッド・テイシー、アンドリュー・サミュエルズ（非常に多くの影響を持ち続けてきた）が含まれる。フェミニスト元型的理論と知られるフェミニストのグループ、発達学派のポスト・ユングアンも含まれる。ユングに関する歴史的フェミニストの業績が、ユングの著作のジェンダー機能の分析をどのように提供したかという例を挙げて、この章を終える。

ユングアンフェミニズムの諸理論の紹介

ユング後のユング派の研究領域内で、「ユングアンフェミニズム」として広く知られる領域がある。「ユングアンフェミニズム」は、前章で述べたジェンダーと女性性に関するユングの業績を意味する。すでに述べたように、伝統的「ユングアンフェミニズム」は、こころと文化の「グランドセオリー」を作りたいというユングの欲求と結びついたものである。

しかし、そこには、同時にユングの著書にある「個人的神話」の要素と呼ばれるものへの批判的気づきの高まりも存在する。この批判は、結果として掴みどころのない、こころの不可知な性質を探索するユングの傾向を述べる。個人的神話の中のユングは、一つの不変な権威的考えを作り出すのは不可能であるということに気付いていた。

この章でポスト・ユングアンの業績に結び付くのは、ユングをグランドセオリーの理論家として扱う事の否定である。グランドセオリーでは、その中核的原理、ここでは反論されるのではなく、拡大される。従って、中核的原理は、ユングの「個人的神話」の伝統の中で機能する。分析家と研究者はユングのこのような理論の特性に対応する。そのため、彼らはジェンダーと女性性に関して業績をつんできた。彼らは女性性が女性心理学にとって決定的な基礎を探索する人々である時はひそかに、また公然と異なる道を歩む。

結局のところ、この章の題材の多くは、自分を「ユングアンフェミニスト」とまったくもしくは少しも思っていない研究者の仕事から引き出される。これらの研究者の業績は「ユングアンフェミニズム」の発展となり、フェミニズムとジェンダー学のより広範な領域に位置づけられるべきものである。

ここで、現代のフェミニズム理論の広範な発達を概観することは有用であろう。フェミニズム研究は、女性がすべての種類の知識が男性の権威的制度であると気づき始めた時に、活発になった。すべての知識、医学、歴史、宗教、文学、哲学、心理学は女性の表現を無視もしくは歪曲してきた。結果的に男性的規範の中の「フェミニスト批評」（あらかじめ人類全般に関する普遍的

真実とされてきた)が、フェミニズムの研究の基礎的方向となった。女性に関するユングのフェミニスト批評の大部分は、本著の2章に収められている。また、3章と4章でユング後のジェンダーに関する重要な研究の多くを論考する。

男性の権威主義的文献への単なる批判だけでは十分ではなかったことに気づき、フェミニスト理論は「女性による執筆」の段階に移る。女性を書くことによって、自分の心理学、歴史、芸術、哲学、宗教を自ら表現しなければならないのである。3章で取り上げられたこれらの業績の多くは女性の自己表現というジャンルに結びつけられる。

それでも、だれか一人の女性が、すべての女性のために著述するという挑戦は、内的、外的女性運動から起こった。そもそも、より広範な政治的、文化的運動であるフェミニズムはより自己批判的になった。それは、一つの単純な「女性」というカテゴリーから抜け出す意識となったのである。異なったセクシュアリティ、階層、人種、民族、文化的立場があり、フェミニズムはそれらの違いの中で、権力とアイデンティティを扱わねばならないという事である。

外面的には、精神分析、脱構築、ポスト現代主義のような理論の影響は、単一で一元的な自己(self)の考えに対して激しい非難を巻き起こした。このような硬直したアイデンティティ概念は、すべての女性をひっくるめて問題のない「女性」集団があるという虚構を作るうえでどうしても必要なのだ。

この新たな政治的、理論的状況への反応の中で、「フェミニズム」は「複数のフェミニズム」になった。そこでは一元的「女性」の説明はもはやその基礎をなくしてしまった；「フェミニスト理論」は、ジェンダー、アイデンティティ、文化、権力問題への様々なアプローチの一つの戦略的同盟なのである。

ユング派の研究が今やっと単なるユングアンフェミニズムよりむしろ様々なユングアンフェミニズムを提供するに至ったというのが筆者の主張である。本書は、このフェミニズムの可能性の拡大から生じた新たな好機を探索するためのものである。ここで特筆すべきことは、ユングがいかにこのように離れた発展を引き起こしたかという事である。この発展は、筆者が「個人的神話」と呼ぶユングの衝動の中で、権威ある理論の概念へのユング自身の率直な疑問の中に見られる。

この章では、ユング以降の創造的な領域ですでに存在していた種々のユングアンフェミニズムに注目してゆく。これら理論家すべては、ユングの「追従者」というより「模倣者」と呼ばれるかもしれない。彼らは、ユングの「個人的神話」を模倣し、それを確固たるものにすることは、決してできない。それを著述することは困難なのだ。これらの模倣者は、何にせよユングの規格を拡充しない。それは、ジェンダー、こころ、文化に関するグランドセオリーへのユングの野心がついてくるからである。

このようなユング派の理論家の特徴づけるものとして、二つのアンドリュー・サミュエルズのポスト・ユングアン学派：元型派と発達派に注目してゆく。二つのポスト・ユングアン学派につい

てアンドリュー・サミュエルズの定義によれば：一般的にユング心理学（すなわち、ユングのグランド・セオリー）の教義として見られるものとかかわりを持つ。しかし、それらと批判的な距離を持つもの。第三の学派は、古典派でユングをより忠実に継承しようと試みる。そして3章でみたように、どのようなフェミニズムも伝統の中に納めようとする。

もちろん、ジェンダーと「個人的神話」に関わるユング派の理論家についてあまりに杓子定規な定義によって、一緒に扱うのは危険が伴う。前章でみたように、ユングのジェンダーと女性に関する議論の限界に非常に批判的な著者が何人もいる。アンドリュー・サミュエルズが指摘しているように、分析家すべてをこれら3つの学派にきれいに分ける定義はない⁽¹⁾。そこで、第3章で論じた理論家の何人かは、発達派もしくは元型的伝統のどちらともとの関係を主張しているといえるかもしれない。

これに反して、この章で取り上げたデイヴィッド・テイシーは「女性原理」概念の一貫した信奉者である。このようなユングアンの特徴は第3章で説明したとおりである。臨床実践においては、これらの発達派のユングアンフェミニズムの影響を取り上げる。その中には、ユングの中核的考えを根本的に修正した研究者を含んでいる。

最近のフェミニズムのあらゆる類の研究は、しばしばジェンダーの歴史的観点に焦点をあててきた。この章の最後は、フェミニストの歴史的探求のユングのアニマ概念へのいらだちに光を当てて例証する。全体として、第4章では、ユングアンフェミニズムの改定の予期せぬ発展とユングアンフェミニズムの挑戦の位置づけに注目する。また、伝統的ユングアンフェミニズムの排他的主張への批判に注目する。結果的に本書の各章を通して、解放され、相互に関連する絡まった、いわゆる「ユングアンフェミニズム」の将来的可能性を検討してゆく。

ユング派研究内からの挑戦

ジェームズ・ヒルマンのラディカルアニマ

ユングのアニマを抜本的に再考した主たる業績はジェームズ・ヒルマンの物である。それによって、女性は無意識の質から解放された。すなわち女性に知的劣等性という烙印付けすることである。二つの基調論文の中で、ヒルマンはユング心理学を再構成した。ユング自身のテキストを批判的に再読することで構成された⁽²⁾。意識的に個人的神話の次元を利用することで、アニマはユングの反対物を考える傾向によって必要条件にされるべきではないとヒルマンは主張した。アニマは男性のこころの反対の性の側（反対の性）でもなく、「彼女〔アニマ〕」は男性だけのものでもない。事実、アニマもしくは「魂（soul）」（ユングの用語どうように）は無意識の元型的構造である。アニマは無意識と同列にならねられる意識であり、無意識の「他者」に付け加えられるものである。

したがって、ユングが提示したようにアニマは関係性の機能であるが、ユングが考えたような人間の関係ではない。アニマはより深い真正の無意識と関わり、自分勝手な自我の安易な制限と

異なるものである。「エロス」はアニマだけに固定されるものではない：セクシュアリティとは全く切り離された機能である。

というわけで、女性アニマもしくは魂を男性のために持っているわけではない。女性は、男性のように自分自身の魂を持っている。女性は、文化的に無視されてきた女性的アニマの促進によって、心理学的に発達させるべきである。どのように、女性と男性はアニムスもしくは「霊 (spirit)」も平等に入手する。

自我構造は英雄神話に基づき、女性的アニマの侮蔑と抑制を学ぶ一つの物語だ。しかし、自我ではないアニマこそ、意識の真の基礎なのだ。アニマは尊大な自我から離れ、こころの計り知れないほど深い他者性に向かう。心的イメージを活性化することで、アニマは自我の支配を犠牲にすることを目指す。自我の支配には意味の制御が含まれる。アニマの意識とは自分の無意識に気づくことだ。それは理論と知識それ自体が、いつも試され、改訂される、暫定的な対象として保持されねばならないという事だ。「理論」とはただの「個人的神話」でしかありえない。

ヒルマンは彼の提唱するアニマを元型的心理学、ソウルメイキングと呼んだ。ヒルマンから見れば、アニマもアニムスも単数形、複数形のどちらにも縛られない；このように掴みどころのない心的存在の本質なのだ。むしろ、アニマとアニムスは内的なこころの結婚の役割を果たす。それらは他者として知られる見方となるのだ。アニマは「根本的本質」ではないため、しばしば「単一」とみらる。しかし、アニマを、調整されたレンズで見ると「複数」と考えられる。

ヒルマンは明らかにユングを模倣しながら、心理学を自分の個人的神話で著述するやり方をとる；そして第二の論文で以下のように結論付ける：「この論文は、アニムスへの批判的活動として登場するアニマの神秘的活動である⁽³⁾。」まずヒルマンはグランドセオリーを作りだすものではないことを主張する（それはアニムスの活動だからである）。ヒルマンはユングの個人的神話に書き込まれたユング自身が認めていないジェンダーに関する文化的偏見から解放することで、ユングの個人的神話の著述を発展させる。

このユングアンフェミニズムをさらに明らかにするために、アニマの改訂をヒルマンが先駆けとなって起こしたポスト・ユングアン学派：元型的心理学の文脈でみてみよう。

元型的心理学のフェミニズム：ポスト・ユングアン学派

元型的心理学を率いた心理学者は、パトリシア・ベリー、パウル・クグラー、デビッド L. ミラー、エドワード S. ケイシーである⁽⁴⁾。二つの異なったポスト構造主義とポストモダニズム（5章と6章で紹介する）を正当なユング派理論をつき壊すことに使うことで、元型心理学はポスト構造主義とポストモダニズムと連合する。まず、元型心理学は元型というユングの中核概念を再構築する。ユングは元型を以下のように定義する。元型とは形式と意味にとって継承された可能性であり、文化的に影響された心的イメージを通してだけ表象される。

うってかわって、元型的心理学者は元型が最初に存在するという考えを否定する。そのイメー

ジだけが本当なのだ。元型的イメージ（それはどのような心的イメージになりうる）が元型であり、元型的イメージが第一の真実なのだ。そのイメージは尊大な自我の認知よりはるかに信頼に足るというわけだ。

次に元型的心理学者は、意識的にユングを権威ある「熟達の」理論家とみなすことを拒否する。ヒルマンは、自著『癒しの虚構』の中で、個人的神話的態度にたつユングを検討する。そして、ユングを自分の心的現実という「虚構」を通して自分自身を癒す者とみなす⁽⁵⁾。この認識に従って、ヒルマンは以下のように主張する。ユングのように、虚構のイメージを自分の考えに向けて形作る限り、その著者が虚構のこころを演ずることから治療的理論枠組みを作り出す。（ちょうど、ヒルマンがアニマがヒルマンのアニマ的評論を形成すると主張するように）

この理論と虚構の絡み合いによって、元型的心理学は洗練されたサトルボディの著述を生み出すことができる。特にジェンダー、性役割、女性性に関する教条的言説を弱めるように考えられた著述を提供する。とりわけ、ユングアンフェミニズムに有益なことは、元型心理学の自我の弱体化である：自我は一つの未熟な英雄神話の産物であり、父権性を根拠のないファンタジーであると思わせることができる。

父権的イデオロギーは女性性を劣等なものであると抑圧することで成り立っている。そこでは「女性」性は、単にぼんやりとした範疇にされてしまう。女性性は「父親たち」によって意味があるか権威があると考えられるものに対する「他者」であることを示すのだ。従って、自我の無意識の抑圧は、ありとあらゆる種類の父権の考えを定義する材料になりうるのである。元型的心理学によれば、(両性の)若い人の自我成長は、すべての「他者」を克服し抑圧する英雄神話の上に構築される事になる。成長する自我は女性的アニマー魂を抑圧しがちになる。自我の主張が主体性の正当な流儀であることへの批判と、自我－英雄と父権の態度との間のつながりを認識することで、元型心理学がユングアンフェミニズムを確実に提供する。

もう一つの元型的心理学のフェミニズムへの驚くべき貢献は、多くの神々や女神を信仰する多神教の容認である。しかし、これは元型心理学のユングアンフェミニズムを前の章で述べた女神フェミニズムと一緒にするというわけではない。もとからある元型がイメージを「作りだす」という考えを放棄するという事は、元型的心理学が女神というものを供給しないという事である。むしろ、イメージをもととの元型とみなすことは（自我の欲動を控くためにイメージを解釈するために）、それを何か言語的なものに還元する代わりに、そのイメージを価値づけることになる。

そこで、自我より優位な心的イメージを維持するには、このようなイメージのヌーメン性と心的共鳴を絶えず提供し続ける必要がある。ヒルマンは、このような態度を心の多神教とよぶ。なぜならそれが現実や重要性のより高い感覚をイメージに与えるからである。ヒルマンのいう多神教は「外のどこか」にある神々を崇めることではない。第3章で見たように、多神教がフェミニズムに本当の可能性を供給する。それは父権的な排除で一神教にされた多神教をもとにもどすの

である。そこでは、存在の他の、異なった、女性的なスタイルを認めることである。しかし、元型的心理学のユングアンフェミニズムには限界がある。

たとえば、自我の頑強な主張を解体しようとする欲求をフェミニズムがいつも純粋な熱狂で迎え入れるとは限らない。父権性に対する論理的解説と父権性をきっぱり否定することはフェミニズムの目標であり、自我は合理性の住処でもある。理性は社会の平等と公正に関する明晰な思考の一部である。フェミニズムは、理性と公正を見捨てることは決してできない。意識の主である自我を弱体化させようとすることは、事実上、合理性と非合理性との対話を霧散させることになる。

フェミニズムの運動が、非合理的他者とみなされてきた女性性の劣等性を取り去るという、道徳的な運動でありえるということである。それは、セルフ／他者、合理性／非合理性といった二元論を超えた同盟との結びつきへと導かれる。もしそうなら、フェミニズムが他のものの上に立つ優越的なあるものなしに、ありとあらゆる相違の包摂を示唆する。さらに概念的な合理性／非合理性次元を解体することには危険がある。それは合理的、政治的な潜在可能性と、現実中存在する権力のヒエラルキーとの結びつきを失うということだからだ。

元型的心理学の自我への攻撃の悪い影響の可能性は、フェミニズムを妨害するもう一つの要素と関係している。元型的心理学では、心的イメージに価値を置く。それは、主体とジェンダーの文化的形成という見解を単に理論的に生み出されたものでなく、実践上去勢してしまう。これについて、ヒルマンは元型－イメージに関して、以下のように述べている：

「『元型的』と称されるいかなるイメージも、直ちに、普遍一般的で、超－歴史的、根本的に深く、生産的で、高度に意図的で、必然的なものとして価値づけられるのである。」^(6) 訳注3)

一方で、元型的心理学者は、心的イメージは多かれ少なかれ元型的と考えられるかもしれないと主張する。事実、これは文化的多様性に価値を置く。というのも人々が経験「するはず」のイメージのヒエラルキーには何の根拠もないと示唆するからである。一方で自我を超えるイメージに価値を置くことは、文化的位置づけの価値下げを意味する。自我が見聞きした歴史と文化を無視することである。ヒルマンが使う「超歴史的」という用語は、物質的条件と結びついたフェミニズムと対立するものである。

逆説的に言えば、筆者としては、ユングの元型の定義に戻って、主体性が構成されるということ提案したい。それは、ジェンダーアイデンティティの文化的、物質的形成に深い関心を寄せるフェミニズムと固く結びついている。形のない元型は創造的エネルギーを供給する：結果として生じるイメージは、主体性の身体的そしてある文化への統合によっても形成されるのだ。

たとえば、母親になるという事は文化、歴史を通じて実に様々である。「母親」の元型的イメージはこの多様性に参与する。多様性は特別な主体性、文化、社会そして歴史的時代を通して形作られる。それは元型の言いようもないほどの多様性の顕現として見る事ができる。また、特別な物質的条件の証明としても見る事ができるのだ。

ユングの元型の超越的側面は否定するが、無意識や魂の優越的真正を強調することで、元型的心理学は、急進的ではあるが比較的狭い次元のフェミニズムを作り出した。とはいえ、筆者が著述してきたように、「他者」のフェミニズムを生み出すというユング派の考えの可能性を枯渇させてしまっていない。詩人で神話創造による男性探求運動の指導者、ロバート・ブライはジェームズ・ヒルマンの業績に関心を寄せる。⁽⁷⁾ フェミニズムの神話創造的男性探求運動をとがめる人はいないだろう。しかし、この人気のある宣伝の主張は、「ユンギアン」のジェンダーの取り扱いにはいくらかの考察が必要だというものである。

ロバート・ブライと神話創造的男性探求運動

ロバート・ブライとその一派は、フェミニズムが男性をダメにしてしまったと信じている。「ユンギアン」の男性元型をこのようなフェミニズムの被害者を真正の「深遠な父権制」へと導くために援用しようとする。さらに発展したこの運動を牽引する著作は、ブライの『アイアン・ジョンの魂（こころ）』である。『アイアン・ジョンの魂（こころ）』はベストセラーとなり、「奥深い男性」や「内なる戦士」「種々の元型」をもたらしている。⁽⁸⁾

特に『アイアン・ジョンの魂（こころ）』の中の特に刺激的な挿話は、全体的に反フェミニズムの色合いを与えている。ブライは、内なる父権制に到達した新米男性に女性との関係で「そなたの剣を高くかかげるか、さもなくば相手の目の前に突き出すのだ」と勧める。⁽⁹⁾ 訳注⁽⁴⁾ 不誠実にも、ブライは「これらの初期の集会では、多くの若い男性にとって、剣を見せつけることと、誰かを傷つけることの区別をつけることが難しかった」⁽¹⁰⁾ これは社会的に無責任な著述であるというのが、筆者のブライの剣に対するとりあえずの反論である。もしも「剣」が暴力でなければ、暴力による脅しではないか？これは単純な支配への誘惑でないだろうか？そうでなければ、男性の理性が優越的であるというファリックな純粋性のメタファーだろうか？よく見ても、ブライの著作とその産物は、陰に陽に女性を貶めることである。悪く見れば、反フェミニズムの反発である。ブライの著述は、あまりにお粗末な解釈であり、父権制の抑圧的で単純な考えで容認することはできない。

神話創造的男性探求運動はユングへの裏切りでもある。それはユングの理論的用語を篡奪して、20世紀初めの男女間の関係を再現しようという意図を正当化するために用いる。ブライとその一派は元型をあまりに単純化する。その意味で、グランドセオリーという流儀のユングに忠実ではない（それがこの章でブライに触れる意味でもあるが）。

神話創造的男性探求運動にとって、一つの元型は英雄的、男性的ジェンダーアイデンティティが、男性には無意識に深く刻み込まれており、そこではフェミニズムの悍ましい近代性などありえないというわけだ。このような見解はユング派の理論ではない：ユングの元型的イメージは生得的に継承されたものではない。ユングにとって、元型はジェンダーに固定されていない。世代を超えて変わらずに保持される安定した一つのイメージではない。そして、元型は元型的イメー

ジを通してだけ知ることができる。元型的イメージは文化と創造的な分ちがたい関係を有している。プライは種々の元型を保守的なジェンダーステレオタイプに変えているのだ。

残念ことに、混乱した白人男性の間で神話創造的男性探求運動は人気がある。その結果、ユング派の理論全体が、非ユング派のフェミニストから、不当にも怪しげなものとなされてしまった。幸い、ユング派の研究がプライに対する力強い反駁を行ってきた。アンドリュー・サミュエルの『政治的なところ』⁽¹¹⁾、そしてデイビッド・テイシーの『男性の再製』⁽¹²⁾の中で、男性性に関するユング派の研究がフェミニズムと進歩的で支持的な対話が生み出している。

他の学派の観点を用いて

デイビッド・テイシー：男性とフェミニズム

フェミニズム理論の近接領域の一つは、運動集団に政治的に関心を寄せるいわゆるジェンダー学である。社会的効果を得るために、フェミニズムは女性どのように男性も必要としている。それは男女両性のジェンダーとその文化と権力に関わる仮定に疑問を呈するためである。デイヴィッド・テイシーは「女性原理」の概念に拘り続ける。それでも本章で取り上げるテイシーの業績は、彼が明言している元型的理論と進歩的男性学との裂け目を埋めようとするものである。ジェンダー学と男性学は長い間物質主義者と社会構成主義者の著述に依拠してきた。

テイシーの立場は、進歩的ユングアンの考察は物質主義志向のジェンダー学の内容から多くを得るというものである。このような理論は、神話創造的男性探求運動のような、危険で懐古的誤りを防ぐうえで、大変有効な機能である。テイシーはそれに対して手厳しい非難を行っている。しかし、男性学はユングを必要とする。というのも物質主義だけでは不十分だからだ。また、こちらのジェンダーへの熱心な関心や本当の社会変革のためのエネルギーの供給といった点でも不十分といえよう。

テイシーによれば、ジェンダーとはイデオロギーを通して、社会的に再生産される。しかしながら、イデオロギーは単なる物質主義的力の作用だけではない。なぜならイデオロギーは元型的基礎を持っているからである。テイシーは自分の支持はフェミニズムの社会的目標のためであると強く主張する。多くのフェミニストどうよう、テイシーもその政治的事業は今だ完全には程遠いとみている。

ユング派風に言えば、フェミニズムとは、何世紀にもわたる抑圧と誹謗中傷の後に、完全な形で迎え入れられる女性原理の興隆であるとテイシーは考える。男性の課題は、父権制の幻想を失った心理的痛みを認めることである。男性には、内なる女性性を抱きとめることで、自分の中により高次の意識を発達させることが必要となる。発達した意識を基にして、内なる女性性を探することは、母親としての一アニマに下落することを擁護することではない。テイシーは、進歩的男女が母性が付随した女性性に同一化することの政治的危険性を喝破している。むしろ、心理的、社会的に父親と結びつくことの再認識することで、息子と娘は、より展開された女性性の形を心

理的に体験し、社会的に認知することが可能になる。アニマはこころと社会にとってもっと幅広い、多様なジェンダーのスタイルを生み出すとテイシー考えている。

ユンギアンフェミニズムにとって顕著な潜在可能性は、元型的要素を社会的変化の理解に持ち込むというテイシーのやり方にある。「不在の父親」（男性学の非常に悩ましいテーマ）は文字通りや感情的に息子にとって存在しない。この特徴は「真正の『父親のエネルギー』の喪失と消滅に所以する。」⁽¹³⁾

このような元型的欠落は、嘆かわしいフェミニズムの結果ではない。これは、父権制への信奉への減弱から起こっており、その不在と同じではない。個人の男性と進歩的心理学の役割は、元型的父性に活力を与えることである。それには、目に見える男性性のやり方だけから父権制や父親であることの放棄を学ぶことによって得られる。より高次の女性的アニマを包摂することは、男性のジェンダーにとって、より持続可能で、柔軟で遊びごろのスタイルへの径となる。

また興味深いことは、この課題と問題に対するテイシーのユンギアン風の語り口が、物質主義的、学術的男性学に真っ向から立ち向かっている点である。元型的力動は神話を通してパターン化されるのかもしれない。テイシーは父権制をクロノスとして描写する。クロノスは悍ましい予言であり、クロノスが飲み込んだ男女の子ども達の一人にとってかわられる。この神話の子ども達が、より多様で解放的なジェンダーのスタイルを表現している。

心理学の用語でいえば、貪り食うクロノスは他の男性性のスタイル（クロノスの息子ゼウス、ポセイドン、ハーデース）と他の女性的形姿（クロノスの娘、ヘスティア、デメーテル、ヘラ）の誕生を妨げてきた。クロノスが単一の元型コンプレックスを指し示す新たな者を食い尽くすという事実が支配権を掴みつづける。そして、心と社会のすべての物がクロノスの専横的スタイルに包摂されてしまう。すなわち、新たな男性学が的確に表すように：抑圧されたもしくは飲み込まれた男性性や女性性のスタイルを、全てを呑み込む父権制とよばれるものから解放することである。⁽¹⁴⁾

しかしながら、テイシーが男性学に批判的なのは、彼が「神話的ズレ」と呼ぶもののためである。⁽¹⁵⁾ テイシーはクロノスの神話から二つの物を見出した。一つは父親に対する敬意と、クロノス神話の好ましい完成を妨げる過渡に強調された母親との関係への集中である。クロノス神話の中で起こっていることは、ゼウスが父親を騙して兄弟姉妹を自由にしたことである。そして、神々と女神たちの（元型的）ごちゃまぜがすべて解き放たれた。男性学で起こっていることは、テイシーに言わせると、クロノス神話からオイディプスの危険な誘惑への落とし込みである。この悲運ないわゆる英雄は自分の父親を殺害する。そのために母親との禁断の抱擁がさらに魅力的となるのである。フロイトは、ジェンダー理論のどこにでもあるのだが、このオイディプスの宿命を恐れたとテイシーは指摘する。父親への崇敬と女性性を母性にのみ還元することからは何の答えも得られない。テイシーから見れば、ジェンダーの諸理論が精神分析のたった一つのオイディプス神話によって妨げられてきた。そこでは、女性性は母親だけに制限される。もしも、進

歩的なフェミニズム理論家がユングだけをみれば、元型的な女性性が母親であるという還元的制限ではないかもしれない。⁽¹⁶⁾

筆者としては、テイシーの業績はユングアンフェミニズムにとって、男性性に焦点付けているにもかかわらず、そしてそれゆえに刺激的な貢献だと言いたい。フェミニズムの社会的格闘をおしすすめるようにデザインされた、ユング派の男性性に関する理論化は、それ自体フェミニズム運動である。理論化とジェンダーアイデンティティにおける個人的要素の強調はここでは本質主義者のそれではない。本質主義者は永遠の男性性を確実に手に入れることを主張する。そうではないものは、他の全ての種類のものに、手を指しのべ、そのための空間を作るのである。

他の学派のフェミニズム理論家からユングをみる

デマリス・S・ウェーア デマリス・S・ウェーアの著作『ユングとフェミニズム 解放の元型』は最初にウェーアの錯綜する二つのトピックのかなり偏った、還元的見方を取り上げるようにみえる。⁽¹⁷⁾ ウェーアは「フェミニズム」（ここでのジェンダーは文化的文脈を意味する）とユング／ユングアンの間に対立物を立ち上げる。ユング／ユングアンはウェーアにとって「女性的なるものは、実際に生物学的、生得的なものであり、[存在の] 存在論的なものでさえある。」

(18) 訳注5)

ユング派理論の生物学的本質主義への還元は、ジェンダーを事実上文化的影響から分離してしまう（そこには「存在論的」なものも含まれる）。このことは、偏見にみちたやり方のユング自身と第3章で吟味した「ユングアンフェミニズム」には支持されるかもしれない。ウェーアは、その主題がいくぶん文化的歪みを受けるとしても、女性原理の「非還元性」についてアン・ウラノフを引用する。

しかし、このようなジェンダーについてフェミニズムが文化構成的、ユング派の理論が完全に本質主義で保守的であるという単純な対立化には問題がある。とういうのもこれは（第2章で見たように）ユングの著作を丁寧にみれば、説明できない。また、第3章で見た形而上学的ユングアンフェミニズムにとっても公正とは言えない。ウェーアはこの点をユングの元型に対するよりニュアンスにみちた論考によって進める。

ウェーアの業績の最も大きな貢献は、神学から知識社会学を繋げる洞察の中にある。これにより、ウェーアは、元型的ジェンダー化のユングの著述を、父権制文化の中で体験される社会的に条件づけられた事実として読み替えることに成功する。ユング自身のジェンダーに関する記述を、文化的ステレオタイプを移す鏡としてウェーアは解釈する。ユング理論につきものの危険は、一つの父権的文化の中の元型的表現があたかも時代を超えた女性の真実として扱うことである。女性元型のユングアンフェミニズムの「グランドセオリー（これはウェーアではなく筆者の用語）」の創造が一つの例である。それは社会的に付随する考えを限定的で頑迷な規定へと硬直させる。

しかし、ウェーアががらがらの物質主義的フェミニズムの評論家というわけではない。彼女のフェミニスト神学の立場がそれを表している。ウェーアはユングとフェミニズムの間に生産的結合を見出そうとする。それは、宗教的体験を肯定的に探究するユング心理学の潜在的可能性によるものである。また、ウェーアは父権制に傷つけられた人々を癒すユング派のこころの可能性も認めている。

「ユングアンフェミニズム」という用語を用いずに、ユングの個人的神話の側面と関係づけながら、ウェーアは「ユングアンフェミニズム」を素描する。意味を見出し、本質的に宗教的で、創造的で文化的に結びついたところというものを仮定するユングをウェーアは高く評価する。このようなユングと、女性に関して還元的断定をする「グランドセオリスト」としてのユングをウェーアは明確に分けて考えるのである。

ナオミ・R. ゴールデンバーグ ナオミ・R. ゴールデンバーグのフェミニズムの見解からのユング解釈は非常に魅力的である。ユングの著述の複雑にからんだ文脈を単純化する「ユングアン」を鋭く批判する。ゴールデンバーグは、ユングを凝縮する多くのユング派研究がたった一つの「グランドセオリー」であると批判する。⁽¹⁹⁾ 筆者もこの点では同意見である。

伝統的ユングアンフェミニストと異なり、ゴールデンバーグは超越的元型理論には見るべきものがないとする。それはジェンダーを限定すると考えたからであろう。「もしも性差別がその基礎にいつも直面化されるのであれば、フェミニストの研究者は、ユング派思想の元型という真実の考えを吟味しなければならない。」⁽²⁰⁾ とゴールデンバーグは主張する。それによってゴールデンバーグは、ユングアンの心的ジェンダーでは文化は何の出番も得られないと言っているようである。既に見てきたように、この立場は元型理論の必須の結果ではない。元型に関するユングの見解に挑戦するために、ゴールデンバーグに残されている他の方法は以下の二つである。父権的性差別を不変なものと受け入れるか、「女性的」元型（女神フェミニズムのような）を探索するかである。しかし、後者の選択は文化的条件からジェンダーを分離するので、ゴールデンバーグには到底受け入れられない。

ゴールデンバーグは罠に落ちてしまっているように見える。その罠とは、彼女の好む立場が、ユングをユング風に教条的で排他的に読解することである。そのため、ユングの両性具有の元型的イメージの可能性を見逃してしまう。そのイメージは、文化的に影響を受けた元型的イメージを通してのみ表現されるものなのだ。

ユングアンフェミニズムを発見しようというゴールデンバーグの企てが終わったその地点をジェームズ・ヒルマンの元型的心理学が取りあげる。ゴールデンバーグは、お気に入りのイメージ—純粋な元型という考え方のために、超越的元型を遺棄する。ヒルマンに言及しているにもかかわらず、ゴールデンバーグの主張は全く異なり、元型は文化的表象の手段であるという考えを強調する。文化と歴史は、こころによって生み出されるイメージを形成する役割を持つ。このユングアンフェミニズムは、以下の三つの要素の組み合わせである：ユングがユング理論の頂点で

あるということへの挑戦、創造的で宗教的なこころの強調、そして三番目に主体性とジェンダーを形作る上での文化の強い影響である。

フェミニストの元型的理論

ウェーアとゴールデンバーグはともにフェミニスト元型的理論という学際的試みに関連している。これを最もよく表している著作はエステラ・ラウターとキャロル・シュライアー・ルップレヒト編、序文の『フェミニスト元型的理論：ユング思想の学際的見直し』である。⁽²¹⁾ この著書は元型的心理学に好意的な関わりを持つにも拘わらず、そこには決定的な違いがある。それは、宗教、心理学、文学、視覚的芸術などの多様な分野のフェミニスト研究者によるアプローチがある点である。従って、この著書にはどうしてもヒルマンが率いた「元型的心理学」運動という用語を用いることが絶対必要となる。そしてこれらのフェミニスト研究者はラウターとルップレヒトの著作によって「フェミニスト元型的心理学」と定義づけられたのである。元型的心理学とフェミニスト元型的心理学は共に超越的元型を、その内在的イメージのために拒否する。この点から両者の違いが始まる。

ラウターとルップレヒトの序文は、1970年代後半から1980年代前半にかけての学会での研究者と方法論的流儀の一致点を説明する。興味深いことに、ヒルマンの元型へのイメージ凝縮に、ラウターとルップレヒトはエーヒッリ・ノイマンの1959年の業績を付け足す。それによって、ラウターとルップレヒトはこのようなイメージは文化によって色付けられると提案するのだ。⁽²²⁾

この思慮深い二重の学術的遺産によって、フェミニスト元型的心理学は心的イメージに抗する社会とイデオロギーの圧力を強調する。これによって、フェミニスト元型理論はその理論自体を人間性へのフェミニズムの介入として位置づけることができる。これは、「女性」という範疇の革新的で解放的説明も提供する。「フェミニスト理論の場合、元型をその内容が固定した一つのイメージではないとみるとすれば…元型が繰り返される経験のある種の関係でイメージを形成し、再形成する傾向とみなす。それによって元型概念は、人類の歴史を貫いて認知されてきた女性に関わることを明確にすることを届けられるだろう。」⁽²³⁾ このような理論には、現代の「フェミニズム」をとりまく数々の不安と問題点との興味深い繋がりが含まれている。一見、フェミニスト元型的理論は本質主義のようにみえる。それは、もろもろの文化と歴史を通じて「女性」と呼ばれる議論の余地のない集団を仮定するからである。これは本当の状況ではない。フェミニスト元型的理論の「女性」は、文化に依拠するイメージを産出する。そのため、「女性」概念は、人種、セクシュアリティ、文化、歴史、健康、年齢を含む差異のどのような形式でも維持し表現する。

フェミニスト元型的理論には、「規範」、どうあら「ねばならない」といったイメージの記述を生み出すための基礎がない。そのためヒエラルキーが生まれ、女性にもあてはめられる。このユングアンフェミニズムにとって、元型は「その顕現に光が当たるまで－過去、現在、未来－を通して、決して完全に知られることがない。」⁽²⁴⁾ これは、元型が完全に知られることは決してない

と主張しているのと同じである。そこでは、基本的もしくは理想的モデルが生み出されることがない。

ラウターとルップレヒトもどのように、女性によって生み出されたこれらのイメージの間にある絶対的もしくは単純な差異を主張しない。また、上記の引用のように「明らかに女性に関わること」のためにそのイメージを探求する本質主義の動機にも拘わらず、それらのイメージは男性のここから引き出される。フェミニズム元型の理論は、意識的にはユングアン理論の領域に含まれる。そこではここは、決定的に身体と結びついている。しかし、ここは身体に支配されているわけではない。ラウターとルップレヒトはイメージの体験的文脈を議論することは絶対必要だと主張する（心的イメージは決して単純に説明できない。というのも、それではその第一のイメージの質を無視することになるからである。これにはユングも賛成するだろう。）

元型的イメージの「体験的文脈」に身体を含めることは可能である。しかし、身体をイメージの重要性の超越的源泉とみなすことはない。いずれにせよ身体もまた元型的ファンタジーの主体「である」。時にこのようなファンタジーは父権的に歪曲されているかもしれない。さらに生物学的性を「自然」なものであり、「文化的」ジェンダーの反対だという分類への挑戦は第6章で考えてゆく。

もちろん、フェミニズム元型理論はユングを父権の権威者として退ける。ルップレヒトが「監獄の言葉」と呼ぶユングの言葉も否定する。⁽²⁵⁾ 父権の言語はユングの女性のアニムスに関する記述に特に顕著に見られる（第2章の例を見よ）。ルップレヒトは「アニミティ（animity）」という用語を作った。それは、ユングの二元的アニマ／アニムスの圧迫にかえて、「たましい」もしくは無意識と親しむ過程を示している。⁽²⁶⁾

フェミニズムの元型の理論は、種々の芸術と諸文化の境界をこえる女性の無意識の痕跡を明らかにすることに精力を注ぐ。女性のここの中での文化的圧力と影響を探求することで社会的影響を考える方向となることができる。しかし、それは決して物質主義的フェミニズムにはなりえない。というのは、それが、無意識の創造的他者性というユング派の中核的見解を継承しているからだ。心的イメージは文化と自我が目当たりしたことに影響されるだろう。しかし、決してそれらに決定されるわけではない。多くのユングアンフェミニズムに共通していることは、ユングが定義した単純化できず多様に変化する無意識の「他者性」という概念である。フェミニズムの元型の理論はこの他者性という原理と、女性間のヒエラルキーの手際よい放棄、それらのイメージ元型とを組み合わせるのである。

発達の心理学：ポスト・ユングアン学派

発達のユング派心理学は、1985年にアンドリュウ・サミュエルズが立ち上げたポスト・ユングアン学派の三つのうちの一つである。⁽²⁷⁾ この中で、サミュエルズは三つの学派を以下のように説明する。ユングの技法を忠実に順守する（古典的学派）、元型理論を修正する（元型的心理学）、

そして正当フロイト派と創造的融和を図る（発達の学派）である。

発達のユング派の特別な特徴は、ユングとフロイト間の繋がりと相違、そしてフロイト以降の精神分析の先駆者の業績を再考することである。発達の心理学は特にフロイト派の乳幼児期に関する記述に関心を置く。たとえばメラニー・クライン、ウィルフレッド・ビオン、ドナルド・ウィニコット、ジョン・ボウルビーが取り上げる「対象関係論」の精神分析である。対象関係を用いて乳幼児期について考えることは、精神分析における転移、逆転移関係の考察に繋がってゆく。

転移は被分析者が自分の不安を知らぬ間に自分の分析家に投影するやり方を表す。分析家が被分析者のこころの一部のスクリーンに事実上なることである。フロイトは転移が談話療法で決定的な役割を果たすのではないかということに気付いた。逆転移は、分析家側におこる相互作用の動きである。ユングは分析家のこころも気づかない内に転移に巻き込まれるかもしれないと主張した最初の実践家だった。そして、このことが、精神分析において非常に有効な手段になり得るのではないかと主張した。

発達の心理学が精神分析的臨床実践とユング派の遺産の橋渡ししようと望んだにもかかわらず、それらの現実の違いはそのままである。フロイト派の理論は還元的であり、後ろ向きでもある。その理論の中で早期乳幼児期のその「場面」をまず研究すべきだと主張する。これに反して、ユングはこころが未来志向的で、前向きであるという見解を強く主張した。夢と心的症状は、人格の将来の発展に合わせられる。その人物がどうなるかもしれないという事の方が、過去にどうであったかという事より、はるかに重要なのだ。

結果的に、ユングはオディプスの構造を自分の全般的なスキーマに含むことを良しとしたが、人の乳幼児期は決して圧倒的な重要性を持つことにはならない。無意識の優越的可能性と創造的な未来志向的な出会いこそ、ユングは第一原理とみなしたのだ。

対象関係論の理論は、フロイト派の精神分析から引き出されているが、決定的修正を伴っている。フロイトが幼児はまず本能によって突き動かされると考えたところを、対象関係論では、子どもはその誕生から、自分の養育者と関わりをもつ能力を持つということになる。ここでの「対象」とは二つの重要な事を指す：すなわち、幼児は関係をもつ相手を得ようとすることであり、幼児がその「対象」にむけるモチベーションとの組み合わせである（子どもの中に置かれた状況として）。

このように対象関係論では、子どもはその誕生から養育者と相互作用する能力を持つと考える。これによって、対象関係論は、継承された何らかの精神的能力を持つということで、ユングとその信念により近いものとなる。メラニー・クラインとユングが共に人生早期の母親との紐帯を強調するという点で、発達のユング派理論は、示唆的な両者の相似と実り豊かな相違に自らを位置づける。

ヘスター・マックファーランド・ソロモンは以下のように指摘する。母親を幼児が早期に「部

分対象」として評価すること、また、「対象」を離れた鏡映現象とは評価しない、クラインの用語は、ユング派の母親の元型的イメージという用語に置き換えることができる。⁽²⁸⁾ これらのイメージは、子どもの母親の身体との非常に早期の体験から形作られる。幼児のファンタジーが「良い」乳房と「悪い」乳房に移行する見解を作り出しゆくであろうというクラインの主張は、養育する母親そして破壊する母親というユングの母親元型の二面性の主張と重なる。

この立場の二つの組み合わせは枝分かれするが、発達のユング派理論では、ユングとクラインは完全に決別する必要はない。幼児のこころを写し取る中で、クラインの部分対象という考え方は、独立した自己感覚を成し遂げるのに先立つ妄想－分裂状態と、おおむねみなされる。母親の非合理的イメージと記憶は、無意識の中に抑圧され、後の分析の中で追体験されるかもしれない。

破壊的／養育的母亲についてユングはより豊かで、ロマンチックな見解を持つ。そのイメージの母親は、ある個人の無意識に棲む。そしてたとえ破壊的形式であったとしても、その個人の将来の成長に役立つように存在する。元型的両親の前向きの創造性を維持しているという点で、発達の心理学はユング派を引き継いでいる。対象関係理論と繋がっているとしても、それが意味するのは、その手法が分析の中で乳幼児期の親子の相互作用（母親もしくは父親との）に焦点づけられるという可能性を持っているということである。

発達派の理論家は、ユングの元型の考え方を非常に早期の心理的発達の文脈に組み込む中で、ユングを否定しない。ユングは人生後半への焦点付けを好むが、単にそれを反転しているにすぎない。

発達のユング心理学の一つの帰結は、ユングアンフェミニズムをフロイト派の精神分析的フェミニスト理論とより首尾一貫性のあるものにする可能性である。この点に関しては第5章で詳述する。その可能性は、例えば、ユング／クラインの母親の扱いを、母親との関係で対象との心理的寄与、そして人の成長にとってのその役割を、どのように批判的に検討してゆくかということを見てゆくことである。このようなユング派－クライン派フェミニズムは、文字通り具現化された母親を形作る、社会的－心的プロセスを探索するために、開かれているのだろう。また、この理論は、こころの中の「母親」という意味深い感覚を築き上げる様を探索可能するだろう。それは非常に豊かな自我の現実の体験を制限するものでない。

もしも、「母親」が創造的に修正されたとする。そうすれば、個人史の中の欠落、もしくは特別な社会での慣習形成、そのどちらからもジェンダーを解放することができるのである。⁽²⁹⁾

アンドリュー・サミュエルズによる（フェミニズムのための）ジェンダーと理論

アンドリュー・サミュエルズと発達学派的親和性は、フェミニズムにとって好意的な父親関係の変革的分析に大きな貢献を果たしてきた。サミュエルズはユング派の考えを革新的、進歩的政治にさらに結びつけ、政治を心理学に結びつけるその事業は今も継続中で、今に至るまで非常に影響力を持ち、革新的であった。⁽³⁰⁾ 対象関係論の評論がほとんど母親－子どもの相互作用に限っ

て強調する。それに対して、サミュエルズが父親を扱ったことは、社会の中のジェンダーロールについて前フェミニズムの考えの可能性を示す。ここで触れられるのは、ユングアンフェミニズムに対するサミュエルズの生産的業績のごく一部にすぎない。

多くのユング派のジェンダー理論家どうよう、サミュエルズもユングの女性に関する文化的偏見に疑いの目を向ける。それにはユングのジェンダーの身体的本質主義という過ちも含まれる。サミュエルズは、アニマとアニムスの概念を遺棄することなしに、こころの中の反対の性は「他者性」のメタファーだと主張する。ジェンダー化された特徴の特別な組み合わせを表現しているのではないということである。他方の解剖学的にイメージに立つものは何であれ、今のところ、不知かたぶん不可知なのであろう。意識とアニマもしくはアニムスとの関係は、ジェンダーのステレオタイプを認めるものとしては扱われない。「あなたとあなたのアニムスもしくはアニマとの関係の違いは、あなたの男性もしくは女性との関係とは異なるのだ。」⁽³¹⁾ またサミュエルズは、「ユングアンフェミニズム」といわれるものに極めて懐疑的だ。サミュエルズにとって、ユングアンフェミニストは本書の第3章で述べたグランドセオリー実践家を意味するのだ。サミュエルズは特に「女性原理」への傾倒に批判的である。女性原理への集中は理論的、政治的にも欠陥があるとみる。理論的欠陥とは、反対のジェンダーに関するユングのファンタジーを神学的調和にまでさえ拡充するからである。「そこでは女性性に関して何か永遠なものがあると仮定されている。すなわちこれは女性性に関してという事である；女性性は超文化、非歴史的なある特徴を示すことになる；また、これらの特徴が心理学的用語として説明されえるからである。」⁽³²⁾ この政治的結果として、ジェンダーへの文化的影響が無視される。そしてユングアンフェミニズムは単なる権力バランスの逆転を目指す。このような反撃はサミュエルズの慎重な評価によって是正される。ユング派の研究ではなぜ「女性原理」を拡充することが必要だと思われかを探求する。この主題と、より肥大化した女神フェミニズムの形式が、ユングの考え方の中から女性を称賛する方法をもたらす。同時に、資本主義的父権的文化を批判する立場を提供する。サミュエルズは、もしも女神フェミニズムがメタファーとして用いられるならば、女神フェミニズムは女性の痛みと苦闘を扱うためのイメージを生み出す実際的な役割を持つかもしれないと評価する。しかし、このような心理治療が、女性の永遠の本質を主張して、字義通り行われると、本質主義的で凝固まった見方になる危険がある。⁽³³⁾

サミュエルズは自分をユングアンフェミニストと自称していない。この理由の一つは、サミュエルズがユングアンフェミニズムを女性原理概念の周りに群がる単一の実在とみているからである（「ユングアンフェミニズム」という用語すらまだ考察していない）。さらに、サミュエルズの進歩的なものへの挑戦はジェンダーの関係より広範であり、フェミニズムのラベルはあまりに狭すぎるのかもしれない。とはいえ、サミュエルズの業績のいくつかは、ジェンダーと精神分析との創造的対話の中で、ユングアンフェミニズムに枠組みを間違いなく提供している。

まず、ユングがアニマ、アニムスと称したものは、女性、男性の両性に共に等しく用いられる。

そこでは、女性が合理的、知的思考にとって「よそ者」であるといった問題は存在しない。また、サミュエルズは、異性愛の先天性、ユングの両性具有的集合的無意識にある暗黙の立場に疑問を呈する必要性を主張する。むしろフロイトの幼児に関する概念を再考することを好む。その概念では、幼児は、性的に弱体化されるか「捻じ曲げる」者である。「両性具有的幻想に頼ることなく、ジェンダーロールとの関係によって性的に多様な立場に適用可能な幻影」⁽³⁴⁾なのである。

『複合的ところ』の中で、サミュエルズは自分の理論的立場を「複合主義」と説明している。それは、異なった心理学を統合しようとするこなしに、それらを活用するという意味だ。または、相対的ヒエラルキーを構築することである。このような理論モデルは、明らかな政治的事業である：それは人々のことなるジェンダー、民族、階級そして個人のこの内の相違も含む、ありとあらゆる相違に関わるやり方を提供するのである。この姿勢は明らかにユンギアンフェミニズムを求めるものであり、ユンギアンフェミニズムを排除するものではない。

『複合的ところ』で非常に重要なことは、父親であることを考えることの困難さが、娘、息子の両方の「ジェンダーの確実性」に厄介なことをもたらすというサミュエルズの提起である。「父親」は生物学的なものではなく、作り上げられた関係なのだ。⁽³⁵⁾父親であることは、主に心理学的文化である。その組み立てられた役割は、(もともとは生物学的な)母親-幼児の条件に決定的影響を与える。また、それを文化的母親-幼児関係へと変形させる。

父親というものが社会的に構成されたという認識は、母親の関係というものが社会次第であるというより優れた気づきとなる。父親は必ずしも生物学的男性の親である必要はない。父親は作り上げられた関係としてみることで、父親-どの性にもよらないという仮定をサミュエルズは可能にする；女性も含まれる「他者性」もこの父親という役割をとれるのである。

ジェンダーという意味で、父親であることの鍵となる問題は、父親の中の欠損という感覚である。父親とは何か不足している存在であり、結果としてジェンダーアイデンティティが凍結された状態である。とういのも、父親との不十分な繋がりが、女性性をもつばらたった一つの役割、母親を中心にするという考え方に引き着く。女性性を母性と等しいとみることは、ジェンダーの可能性を狭量な因習の中に圧縮し、娘も息子も傷つける。

サミュエルズは言う。娘に必要なことは、自分たちの父親からのサミュエルズがいうところの「エロティックな再生」である。⁽³⁶⁾父親の情緒的エネルギーには、娘に母親のそれを超える情緒的、心理的自己認識を与えるためのセキシュアリティが含まれている。これは、父親と娘の間のセキシュアリティの行動化-容認することではない：字義どおりの近親姦は明らかに有害である。⁽³⁷⁾

むしろ、これは一見心的エネルギーを性的と考える「フロイト派」の考え方のように見える。どのようにサミュエルズはユング派として、エロティックなエネルギーが何か他のものを表現しようということを提起する：より複合的なジェンダーの可能性である。父親と子どもの間のエロティックな再生の価値は、ジェンダーに関する想像をより膨らませ、「ジェンダーの混乱」さえ

招くかもしれない。サミュエルズはジェンダーの混乱（痛みさえ引き起こすかもしれない、社会的規範に対抗するジェンダーの再考を可能にする）とジェンダーの確実性（アイデンティティの安定感に必要ではあるが、伝統的ジェンダーへの期待の上に築かれる）の間の緊張にある人に可能な分析的実践を求める。⁽³⁸⁾

この「ユングアンフェミニズム」は、父親である事の解放的概念をフロイト派の精神分析と分かちがたく結びつきながら発展させる。そこには、こころの前向きな動きという見解を使う事で、ユング派のフェミニズムが残っている。どうように、ジェンダーを制約する慣習を新たに方向づける複合的で創造的無意識も用いられている。

この無意識の創造性は、サミュエルズが『複合的こころ』の中で、社会の中で政治的に進歩的な父性を探索するうえで、大きな根拠となっている。このような存在は、ジャック・ラカンの制約的、男根的父親（phallic father）の影響を和らげることができる。男根的父親はながきにわたって社会の形成と父権制を不朽にしてきた原因なのである。サミュエルズは、ジェンダーの混乱という父親を、ジェンダーの確実性であるラカンの象徴的父親に対抗するものとして位置づけるのだ。⁽³⁹⁾ 次章では、このラカンの修正的読解を通して、ユングアンフェミニズムのさらなる可能性を探求していこう。

歴史、フェミニズムそしてユング

この章を、今までのユングアンフェミニズムの業績を取り上げることで終えたい。その一例として、サミュエルズのジェンダーの混乱の議論を取り上げながら、ユングの歴史的フェミニズムの評論の可能性について述べる。

第1章と第2章では、ユング心理学の生成におけるジェンダーの政治学に、ユングの個人的女性霊媒との関わりが、いかに影響しているかを示してきた。ユングの人生と著作中の女性たちは、アニマという男性のこころの中の女性的部分の特徴に置き換えられた。ユングの後の人生での霊媒のようなザビーナ・シュピールラインとトニー・ウォルフとの間で反復されたにも拘わらず、女性霊媒へのユングの魅力は、単にある女性の人柄に魅了されたといったものではなかった。実際、ユングの霊媒を引き付ける魅力は、ユングの後半の人生において彼の霊媒になりたいという欲求と分かちがたいようにみえる。この霊媒は、トニー・ウォルフという人格の中でユングの情緒的生活の女性としてあり続けた。

最も重要なことは、ユングが自分の中の無意識的人物、とりわけアニマと関わるときに、非常に霊媒的になることだ。ユング心理学を男性的理論とみるジェンダーの政治学は、ユング心理学を、圧倒的に女性と関わりをもつ、問題の多い、行き過ぎたスピリチュアリズムだと再定義する。ジェンダーの見地に立つと、我々の男性的－権威主義の心理学は、その中にある「他者性」（女性性）と、今も「科学的」説明で定義されている精神的症状を、曖昧にしようとしている。

合理的なもの、自我の理論的精神にとつての「他者性」は無意識である。無意識に対するユン

グの第一のイメージは女性的なアニマである。ユングは他者性を女性的とする理論的關係を仮定するために、霊媒を借用する。現実の女性であるこの女性性はユング理論では、女性性すなわちアニマと置き換えられてしまい、この「他者性」は理論と明確な思考そのものに置き換えられる。

しかし、この歴史的に基礎を置くフェミニズムの論評は、ユングの中の彼の個人的歴史と心的生育史の間をゆれる両価性だと認識されなければならない。ユングは、自分の女性霊媒への欲動と、文化的に「女性的」霊媒と定義される役割を置き換える。これによって、アンドリュー・サミュエルズ風に言えば、ユングは「ジェンダーの確実性」と「ジェンダーの混乱」という連続体をそのままなぞっている。

霊媒を文化的に女性的立場とみることを（典型的な臨床実践と広く行き渡った正統的医学の中では「他者性」であるため）拡大するために、ユングのころは、霊媒のような女性という情緒的生活に固執し、霊媒をジェンダー化する。ユングは二つのあいだで揺れ動く。ひとつはジェンダーの確実性であり、他人、違う人物の女性性に魅了されることである。もう一つはジェンダーの混乱であり、「女性的」霊媒の立場を自分がとることである。これにより、ユングは自分の中の「他者性」により近づくとする。

ユングが霊媒であるとき、ユングはあらゆるものをさておいて自分の女性的アニマに焦点をあてる。あたかも、ユングが女性的になるために無意識を必須とするかのようにである。これは、自分の（男性的）自我が女性性に圧倒されることから守るためであり、自我の男性性を維持するためである。これらの事は非常に重要である。たぶん、ユングのジェンダー化された反対物を考える傾向は以下の主張に最も顕著にみられる。アニマを自分の絶対的に男性的な意識にとって、一筋縄ではいかない無意識的反対物と主張することで、内的な傷つきやすさを示すのである。これは、ユングのジェンダーの混乱によって脅かされるカオスに対抗するため自分のアイデンティティを誇示する必要性を如実に示している。

ジェームズ・ヒルマンのアニマ理論は、男性的、英雄的自我をすてることを提起する。また、アニマに基礎を置き、無意識と女性性に帰属する意識に方向づけるためである。たぶん、ユングはジェンダーの混乱の中で既にこの立場にたどり着いていたかもしれない。すなわち、ユングの「女性性」への欲望、そして無意識的力である霊と結びつく「女性的」霊媒でありたいという二つの欲望の間のジェンダーの混乱によってである。

さらに、ユング心理学におけるジェンダーの混乱（霊媒として）とジェンダーの確実性（自分の意識を男性的理性、女性を自分の無意識的アニマへの圧縮という硬直した定義）の間には揺れがあり、これはユングのグランドセオリーと個人的神話を二元論的傾向の解釈である。グランドセオリーを作りあげるもろもろの概念は、反対物の緊張の上に強く依拠しており、特にジェンダーを反対物として構造化することに拠っている。したがって、グランドセオリーは、ジェンダーの確実性への欲動を生み出す。そこで、個人的神話を、対照をなす概念の一組の無意識的他者性に還元不能であると認めることは、ユングがジェンダーの混乱に忠誠と読むこともできるだ

ろう。

この状況を認めるユング派の研究はゆっくりであるかもしれない。しかし、いまやそれらの研究はユングアンフェミニズムの時代に踏み込んできている。さらにこれらの研究は、第3章で紹介されたグランドセオリーに一影響されたユングアンフェミニズムを是正し、多様化する。第5章では、元型的心理学のポスト構造主義への関心をたどることになる。また、発達の心理学の精神分析への肯定的関わりを追う。それらは、再構築された新たなユングアンフェミニズムとジェンダーに関するポストフロイト派の理論という、より広範なフェミニズムの議論において主要な二つの領域と考えられる。その後、第六章では錬金術と身体に関するユング派理論の読解の潜在可能性に注目してゆく。これらによって、フェミニズムの中核の関心事としてのユング派の果たす役割を概観してゆく：すなわち、物語、ゴシック、崇高さ (sublime) とポストモダニズム運動である。

まとめ

ジェンダーに関する前フェミニズムの考えは、「ユングアンフェミニズム」として知られる、すべての女性のための心理学の創造から、より多様で分化した「ユングアンフェミニズム」へと移り変わってきた。筆者はユングアンフェミニズムをユングの著述の「個人的神話」の側面に関係づける。というのも、ユングを一人の権威的「グランドセオリスト」と扱うことを避け、ユングの考えを承認、というより促進するからである。

元型的心理学と発達心理学というふたつのポスト・ユングアン学派は「個人的神話」と結びつけて考えることができる。それは、ユングアンフェミニズムを構築するために、ユングを反映し、批判的次元として取り込むことによる。これらの学派を主に「フェミニスト」と定義はできない。加えて、ユング派研究と他の諸学派の見地からうまれたこれらの学派は共に、ジェンダーの進歩的議論のために、男性性をユングと結びつけて取り扱う。このような動きは、反動的なユングの過度に単純化に対する対抗勢力として喜ばしいものである。

そして、最後に、歴史的に位置づけられたフェミニスト研究は、ユングを、ジェンダー、女性、心理学、制度的に裏付けられた理論状況を覆う、現代の不安という文脈に位置づけることができる。理論的フェミニズム（「相違」と独自の文化的文脈によって）との同盟を模索するフェミニズムは、その答えとしてユングの個人的神話と出会う。どのように「ユングアンフェミニズム」という集団の創始者であり、ジェンダーを「一つ」とみるその傾向によって、ユングは「ユングアンフェミニズム」の主唱者でもあるのだ。

更なる学習のための文献^{訳注6)}

ジェームズ・ヒルマンのアニマと元型的心理学

Hillman, James, 'Anima', *Spring: A Journal of Archetype and Culture* (1973), 97-132, 'Anima II', *Spring: A Journal of Archetype and Culture* (1974), 97-132.

Hillman, James, 'Anima II', *Spring: A Journal of Archetype and Culture* (1974), 113-46.

ユングのアニマについて、フェミニズム分析に共感的で、積極的で説得力のある再考である。

Hillman, James, *Archetypal Psychology: A Brief Account* (Dallas, Tex.: Spring Publications Inc., 1983/2004), p.25. [ジェームズ・ヒルマン著, 河合俊雄(訳)(1993) 元型的心理学 東京: 青土社, p.33]

元型的心理学への利用しやすい入門書である; ジェームズ・ヒルマンの2004年までの包括的な業績一覧を含んでいる。

人間性におけるユングアンフェミニズム

Barnaby, Karin, and D'Acerno, Pellegrino (eds), *C.G. Jung and the Humanities: Towards a Hermeneutics of Culture* (London: Routledge, 1990).

パウル・クルーガーとフェミニストの元型的理論家キャロル・シュライアー・ルップレヒト、そしてロバート・ブライを含んだラウンドテーブルディスカッションなど、他の元型的心理学者による意義ある魅力的な論文集である。

Tacey, David, *Remaking Men: Jung, Spirituality and Social Change* (London: Routledge, 1997),

神話的男性探求運動とその誤りについて知っておくべきことをすべて教えてくれる。

Jung, Emma, *Animus and Anima* (Woodstock, Conn.: Spring Publications, 1957). [エンマ・ユング著, 笠原嘉, 吉本千鶴子(訳)(2013)『内なる異性- アニムスとアニマ (バウンダリー叢書) 海鳴社]

この初期のユングの見解を拡大する著作の中で、エンマ・ユングはユングの否定的アニムス論に関して、肯定的で鋭い評論を行っている。

Demaris S. Wehr, *Jung and Feminism: Liberating Archetypes* (Boston: Beacon Press, 1987) [デマリス・S・ウェア著, 村本詔司・中村このゆ(訳)(2002)『ユングとフェミニズム 解放の元型』ミネルヴァ書房]

ユングとフェミニズムの間の「反対物」を単純化している。ユングを人間性の中のフェミニズムの考えに統合するための価値ある議論に進む。

フェミニズム的元型的理論

Lauter, Estella, と Rupprecht, Carol Schreier, *Feminist Archetypal Theory: Interdisciplinary Re-Vision of Jungian Thought* (Knoxville, Tenn.: University of Tennessee Press, 1985)

この重要なユングアンフェミニズムにとって包括的な入門書。文学、視覚芸術とフェミニストセラピーについての評論を含む。

発達のユング心理学とアンドリュー・サミュエルズ

Samuels, Andrew, *The Plural Psyche: Personality, Morality and Father* (London: Routledge, 1989)

ユング派の研究を包摂するため「多様性」を求め、「ユングアンフェミニズム」という用語を使うことのない、好例となった。ユング、フロイトそして彼らの伝説の文脈でジェンダーに関する非常に革新的で進歩的な業績である。

Samuels, Andrew, *Politics on the Couch: Citizenship and the Internal Life* (London: Profile Books, 2001).

心理学と政治の魅力的、楽観的読解。非常に親しみやすく、ジェンダーへの政治的アプローチと心理学的アプローチをうまく混ぜてある。

Young-Eisendrath, Polly and Dawson, Terence (eds), *The Cambridge Companion to Jung* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), Young-Eisendrath, Polly, with Wiedemann, Florence, *Female*

Authority: Empowering Women through Psychotherapy (New York: Guilford Press, 1987).
広範な文献を伴った元型の心理学と発達の心理学両方の有益な紹介書

原注第4章 ユンギアンフェミニズムとは

- (1) Andrew Samuels, *Jung and the Post-Jungians* (London: Routledge, 1985), pp.210-12. [サミュエルズ・A. 著, 村本詔司, 村本邦子 (訳) (1990) 『ユングとポスト・ユンギアン』 創元社]
- (2) James Hillman, 'Anima', *Spring: A Journal of Archetype and Culture* (1973), 97-132, 'Anima II', *Spring: A Journal of Archetype and Culture* (1974), 113-46.
- (3) Hillman, 'Anima II', p.140.
- (4) さらなる元型心理学者については, Karin Barnaby and Pellgrino D' Acierno (編) *C.G.Jung and the Humanities, Towards a Hermeneutics of Culture* (London: Routledge, 1990), pp.307-40. を参照せよ。
- (5) James Hillman, *Healing Fiction* (New York: Station Hill Press, 1983), pp.307-40.
- (6) James Hillman, *Archetypal Psychology: A Brief Account* (Dallas, Tex.: Spring Publications Inc., 1983/2004), p.25. [ジェイムズ・ヒルマン著, 河合俊雄 (訳) (1993) 元型的心理学 東京: 青土社, p.33]
- (7) ジェームズ・ヒルマンとロバート・ブライの関係については, デイヴィッド・テイシー, *Remaking Men: Jung, Spirituality and Social Change* (London: Routledge, 1997), p.91.を見よ。また, Hillman and Bly, "Creativity Symposium", in Barnaby and D' Acierno (eds), *C.G.Jung and the Humanities*, pp.153-61. 参照。
- (8) 神話創造的男性探求運動の中核となる二つの教科書は, Robert Bly, *Iron John: A Book about Men* (Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1990 [ロバート・ブライ著, 野中ともよ (訳) (1996) 『アイアン・ジョンの魂 (こころ)』 集英社]) と Robert Moore and Douglas Gillette, *King, Warrior, Magician, Lover* (San Francisco: Harper Collins, 1990) である。
- (9) Robert Bly, *Iron John*, p.4.
- (10) 同上, p.4.
- (11) アンドリユー・サミュエルズは *The Political Psyche* (London: Routledge, 1993), pp.183-95 の中でブライの神話創造的男性探求運動について言及している。
- (12) Tacey, *Remaking Men*.
- (13) 同上, p.43.
- (14) 同上, p.48.
- (15) 同上, p.49.
- (16) 同上, p.69.
- (17) Demaris S. Wehr, *Jung and Feminism: Liberating Archetypes* (Boston: Beacon Press, 1987) [デマリス・S・ウェーア著, 村本詔司・中村このゆ (訳) (2002) 『ユングとフェミニズム 解放の元型』 ミネルヴァ書房]
- (18) 同上, p.10.
- (19) Naomi R. Goldenberg, 'A Feminist Critique of Jung', in Robert L. Moore and Daniel J. Meckel (eds), *Jung and Christianity in Dialogue: Faith, Feminism and Hermeneutics* (Mahwah, NY: Paulist Press, 1990), pp.104-11.
- (20) 同上, p.108.
- (21) Estella Lauter, Carol Schreier Rupprecht (eds), *Feminist Archetypal Theory: Interdisciplinary Re-Vision of Jungian Thought* (Knoxville, Tenn.: University of Tennessee Press, 1985)
- (22) Erich Neumann, *Art and the Creative Unconscious*, (tr). Ralph Manheim (Princeton: Princeton University Press, 1959), p.82.

- (23) Lauter and Rupprecht (eds), *Feminist Archetypal Theory*, pp.13-14.
- (24) 同上, p10.
- (25) Carol Schreier Rupprecht, 'Enlightening Shadow: Between Feminism and Archetypalism, Literature and Analysis', in Barnaby and D' Acierno (eds), *C.G.Jung and the Humanities*, pp.279-93, at p.238.
- (26) Lauter and Rupprecht, *Feminist Archetypal Theory*, p.227.
- (27) サミュエルズの *Jung and the Post-Jungian* [サミュエルズ・A. 著, 村本詔司, 村本邦子 (訳) (1990) 『ユングとポスト・ユングアン』 創元社] を見よ。
- (28) Hester MacFarland Solomon, 'The Development School', in Polly Young-Eisendrath and Terence Dawson (eds), *The Cambridge Companion to Jung* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp.119-40, at p.225.
- (29) Andrew Samuels, *Jung and the Post-Jungians* (London: Routledge, 1985), pp.210-12. [サミュエルズ・A. 著, 村本詔司, 村本邦子 (訳) (1990) 『ユングとポスト・ユングアン』 創元社], *The Plural Psyche: Personality, Morality and Father* (London: Routledge, 1989), と *The Political Psyche* (London: Routledge, 1993). を参照せよ。
- (30) Andrew Samuels, *The Political Psyche* は政治、権力、心理学の分野でユングを再考する好例である。また、*Politics on the Couch: Citizenship and the Internal Life* (London: Profile Books, 2001) 参照せよ。
- (31) Samuels, *The Plural Psyche*, p.104.
- (32) 同上, p.98.
- (33) 同上, p.98-100.
- (34) 同上, p.104-5.
- (35) 同上, p.71-2.
- (36) 同上, pp.82-5.
- (37) 同上, pp.82.
- (38) 同上, pp.94.
- (39) Samuels, *The Political Psyche*, p.131.

訳 注

- 1) 本章は Susan Rowland (2002) *Jung A Feminist Revision*, Oxford: Polity Press の 4 章、4 章の注の翻訳である。翻訳に当たっては著作権を有する Polity Press 社より許諾を得た。
- 2) Jung, C.G. (1963) *Memories, Dreams, Reflections*, New York: Random House, Inc. p.17 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。ユング著, 河合隼雄, 藤縄昭, 出井淑子 (訳) (1972/1973) 『ユング自伝 1 - 思い・夢・思想。』 みすず書房, p17。
- 3) James Hillman, *Archetypal Psychology: A Brief Account* (Dallas, Tex.: Spring Publications Inc., 1983/2004), p.25. 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。ジェイムズ・ヒルマン著, 河合俊雄 (訳) (1993) 『元型的心理学』 東京: 青土社, p.33。
- 4) 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。ロバート・ブライ著, 野中ともよ (訳) (1996) 『アイアン・ジョンの魂 (こころ)』 集英社, p.15。
- 5) 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。デマリス・S・ウェーア著, 村本詔司・中村このゆ (訳) (2002) 『ユングとフェミニズム 解放の元型』 ミネルヴァ書房, p.25。
- 6) 参考文献、原注で取り上げられた文献で和訳されているものを [] に示した。